

働くことで得られるもの

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役／チーフエコノミスト 土田 浩

映画「マイ・インターン」を観た。70歳、妻に先立たれた元ビジネスマン（ロバート・デ・ニーロ）が、若者ばかりの急成長企業のシニア・インターンに採用され、超多忙な女性社長（アン・ハサウェイ）のお世話係になる。目の付け所良く自発的に動き、望外の成果に感謝感激される。隣席の若手からはITスキルを素直に教わる傍ら、公私にわたる助言・応援をして固い絆を築く。

夢のような舞台設定だった。自分がこんな機会に恵まれたら、なんと幸せなことだろうと。働く喜びの幅広さを、改めて発見した気分であった。

リクルートワークス研究所のWorks Report 2020の特集『働く×生き生き』を科学する』では、1,600人の自由記述調査から「生き生き働く」イメージのキーワードを抽出した。これによると、自身の強みの発揮や、やりがいといった仕事自体の魅力だけではなく、「出社する楽しみ」、「無意識のうちの協力関係」、「同僚や上司とのコミュニケーション」といった「職場」を意識した回答も目立つ。

加えて、「働くこと」からは少し離れるが、職場には、仕事以外の情報交換・意見交換や、日々の顔合わせによる心身状態の確認といった、コミュニティのような効果がある。アフターファイブになれば、こうした効果は一段と増す。

昨今、新型コロナウイルスとの戦いが長期化している。私自身、以前であれば、黙っていても飲み会などの誘いが来て、参加の返事をするだけで、様々な人とじっくり話を出来るのが当たり前だった。それが最近では、出勤こそ毎日しているものの、職場外で実際に会う人、会話する人が極端に少なくなり、この状況がいつまで続くのかと思うと気が重くなる。

リモートワークをしているSNS友達のつぶやきを見ても、寂しさやストレスを訴える声が増えた気がする。「狭い家で一日パソコンに向かうのはもう耐えられない」、「自分のスケジュールがいつの間にか打ち合わせで一杯」、「リモート・マネジメントの仕方に自信を持ってない」、「得も言われぬ孤独と不安」。とりわけ転職・転勤から日が浅い人や、プロジェクトチームの新規メンバーなどは、何倍も悪戦苦闘しているようだ。世の中、そんなにタフな人ばかりではない。命令一本で社員がその通り理解し行動するのにも、限界があるということだ。

新型コロナの感染拡大を契機に、リモートでの会議・セミナーや仕事の進め方が急速に普及したことは画期的である。リモートシステムの使い勝手も、どんどん改善されている。

ただし、何でもオンライン化せよという発想には、危険なものを感じる。リアルな場で得られる満足感には、単純な論理では説明できない、人間の本能的な欲求が含まれていると思えるからである。

世界で最も著名な女性ジャーナリストのナオミ・クライン氏（カナダ）は、「非接触型テクノロジーの拡充が、『人間をマシンに置き換える』構想を加速させる」と警鐘を鳴らしている。因みに彼女は、2007年の著作「ショック・ドクトリン—惨事便乗型資本主義の正体を暴く」で“米国型帝国主義”を痛烈に批判したが、コロナ危機発生後の米国の戦略を予見するにも参考になりそうだ。

オンライン・ツールは確かに強力な新兵器であるが、大事なことは、リアルとオンラインを上手に使い分けることであり、そのために各会合の意義・目的や効果・影響などをしっかりと問い直すことではないだろうか。